

それならば北米合州国の国籍を持つ「白人」はおろか、「黒人作家」にも、「女性性器切除問題」には、発言権はないのだろうか。西洋女性の発言権を「現地」の人々が否定するならば、それによって今度は抑圧されていたはずの「アフリカ女性」が抑圧者の地位に就く、という転倒が待っている。

ウォーカーは『戦士の刻印』のナレーションでは「性器切除」、施術師の女性への質問（尋問？）では「割礼」と、用語を使いわけていた。「礼儀」を装うこの「二枚舌」に、正義感と癒着した慙懃無礼さを嗅ぎ取るのは容易かもしれぬ。だが特権という暴力と無縁な「話者」はありえない。「ツンガ、すなわち性器切除を行う者は、それを受けた女性によって殺されるとき、初めてその価値が部族に認められる。（中略）それによって彼女は聖者の地位まで上ることができる」。ウォーカーが作品中の老女施術師に語らせたこの「告白あるいは嘘」は、作者本人にも象徴的な次元で跳ね返る。作中で主人公にこの老女を殺害させた作者は、Female Genital Surgery (FGS) を地上から「切除」する使命を、自らが被る批判によって贖いうるのだろうか。

*本件については岡真理『『女子割礼』という陥穽、あるいはフライディの口』『現代思想』1996年5月号をご参照いただきたい。

連載 25

女子割礼／性器切除／手術問題余話

文化間倫理の隘路と話者の政治学

国際日本文化研究センター 研究員

稲賀繁美
inaga shigemitsu

アリス・ウォーカーの小説『喜びの秘密』（1992年；集英社、柳沢由実子訳、1995年）、さらには、彼女の映画『戦士の刻印』によって取り上げられた《「女の割礼」描写に黒人女性ら反発》という囲み記事が朝日新聞に登場したのは、1994年一月六日だった。北東アフリカから西アフリカにかけて施術の習慣のみられるこの「女子割礼」に対しては、『ホスケン・レポート』（1982年に第三版）をはじめとする欧米の人権保護団体が、これを女性の人権を著しく侵害する暴力的な「切除」であり、かかる蛮行は文化の名に値しない、と糾弾してきた。「切除」は、父権主義的支配の証拠として標的にされ、アフリカ／イスラーム圏一般を女性抑圧社会と規定する拡大解釈をも招いた。そして「切除」を批判するウォーカーは、スーダン出身の「アフリカ出身米国人」から支持を得どころか、かえって抗議を蒙るに至った、という。

女性差別を糾弾する姿勢が、差別を温存しているとみなされる文化圏にたいする差別意識を温存し、居丈高な優越感を正当化する口実となる。差別だとする決めつけそのものが、西欧＝普遍による、非西欧＝地域の文化的抑圧に重なり合う。隷属と無知に捕らわれた女性たちへの同情が、そこから脱した自分たちの自己肯定と表裏をなす。だが、